

前史

第一章 先史

人類の歴史は、多くの寒冷期と温暖期の変動に特徴づけられ、約二万年前の最終氷期最寒冷期以降は後氷期である完新世に向けて急激に温暖化した。この大規模で急激な気候変動と海水準変動は陸域と海域を変え、人類の活動に大きな影響を与えた。特に完新世に起きた海水準変動を「縄文海進」と呼ぶ。この縄文海進によって、約七千年前には、現在に比べて海面が二―三メートル高かったと考えられており、日本列島各地で海水が陸地深く浸入した。縄文時代に起こったこの現象により、北海道はほぼ現在のような島国となった。また、縄文時代は土器の形式や石器・骨角器などの組合せを目安として、早期・前期・中期・後期・晩期の五期に区分される。

安平町では、縄文時代早期・前期に属する遺跡は発見されていないが、縄文時代中期に属する遺跡として、安平A遺跡（旧早来町）・アケシユンベ遺跡（旧追分町）がある。これらの遺跡からは、東北地方の影響を受けたと考えられる円筒上層式土器が出土している。

縄文時代後期になると繊細な器形や文様の土器が使われ始め、続く縄文時代晩期は工芸的土製品を遺した亀ヶ岡式土器で代表される文化が津軽海峡を越えて渡島半島に及び、石狩低地帯付近までその影響

が見られ、旧早来町が亀ヶ岡文化のほぼ北限を示すとされている。

安平B遺跡（旧早来町）から出土した土器縁部の上位には沈線と斜行縄文で文様がつけられ、下位はすり消された浅鉢形土器や裏から竹管様のもので突いた突瘤文、あるいは沈線に囲まれた三又文で代表される東三川式土器に共通する要素を持っており、大町A遺跡（旧早来町）や大町B遺跡（旧早来町）・緑丘遺跡（旧早来町）で見つかった土器は、亀ヶ岡式土器のうちでも縄文時代晩期の末期に属する大洞A式土器の一つ（時間や地域、用途に応じて多様に変化している）と言われている。

本州では縄文時代に続いて弥生時代に入るが、稲作栽培に適さなかった北海道では弥生文化圏からの金属製利器の供給と縄文時代の狩猟・漁労を受け継いだ続縄文時代となる。この時代の前半にはヘラ書き沈線の多い大狩部式土器があり、安平D遺跡（旧早来町）・瑞穂A遺跡（旧早来町）からも一部採集されている。

続縄文時代に続く北海道独自の文化である擦文時代の特徴として、土器や鉄器の使用が挙げられる。八世紀になると、古墳文化の流れをくむ土師器を持つ集団が北上し、その文化的影響のもとで北海道に擦文式土器が生じた。これに北大式土器が文化接触して地方ごとに特色ある土器が生まれた。さらには鉄器が多量に出土し、安平D遺跡からも、擦文式土器とともに鉄の刀子（短刀）が出土している。また、この擦文時代に並行してアイヌ文化時代を措定することができ、町内の幾つかの遺跡からアイヌの人々が使用したと思われる鉄製の鉾や金属製品が出土している。ただし、アイヌ文化の起源や形成過程については不明な部分が多いことを念頭に置く必要がある。

『早来町史』では、これまで出土した遺物を手がかりに、早来以北の安平川本支流流域の丘陵地帯に遺跡が分布し、付近に湧水等があることから、この辺りの安平川が海に注ぐ河口で、鮭漁なども盛んに行われていたのではないかと推察している。その後、海退が進んで石狩低地帯が地続きとなつてからは、鮭の遡上が減ってアイヌの人々もここに住みつかず、東西蝦夷地の交通路もしくは密林が繁茂する鳥獣の狩猟場となったと記している。また、この地域は鹿の群生地として知られ、アイヌの人々は鹿を食糧としたほかに、皮で衣服を作り、余分は売っていたと言われている。

第二章 安平村

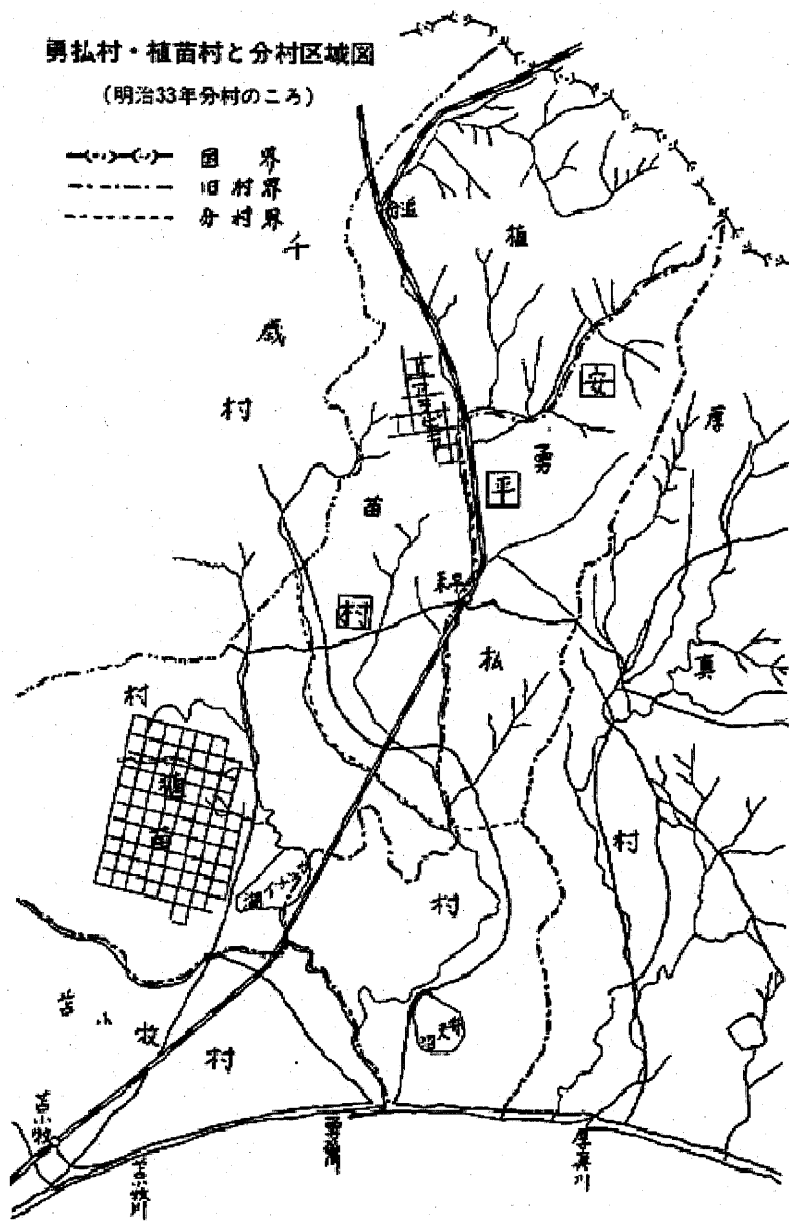
第一節 鉄道の敷設と市街地の形成

明治二（一八六九）年七月、明治政府は北海道に開拓使を設置し、同年八月には蝦夷地を北海道と改称して一一国八六郡を置いた。旧早来町開基の地であるフモンケ地区（現早来富岡）は、早くから植苗村美々（現苦小牧市美沢）をはじめとする苦小牧方面の住民たちの馬の放牧地として利用されていた。植苗村美々において駅通・宿屋業を営みダンツケ運送（駄つけ、馬を一列に並べて駄載運搬する方法）の仕事をしていた新潟県人の井上利三郎は、病鶴がこの沢地に浴して病を癒したとの話を聞き、明治四年二月に鶴の湯温泉を発見している。

明治六年十二月に勇払郡管下町村を定め、支安平川および合流点以南の安平川を境界として、左岸（南東部）は勇払村に、右岸（北西部）は植苗村に属することとなった。また同年には開拓使による札幌本道（室蘭―札幌間）が開通し、翌七年には植苗村美々に官営の鹿肉燻製所（明治十一年に缶詰製造所を増設し、開拓使美々鹿肉缶詰製造所となる）が設置された。植苗村美々は北海道が蝦夷地と呼ばれた頃

勇払村・植苗村と分村区域図

(明治33年分村のころ)



から水路による勇払越えの要地であったが、札幌本道開通後は官営工場の建設によって一躍脚光を浴びることとなった。一方、明治初期の早来地方は鹿の群生地であったことから、アイヌの人々の中には鹿猟を生業としていた者もあり、鹿の乱獲が大きな課題となったため、それを防止する目的で、開拓使は明治八年に鹿猟規則を制定し、猟器および狩猟期を制限するとともに、狩猟者に免許鑑札を下付した。加えて、アイヌの人々に対しては古くから使用してきた毒矢を禁止し、猟銃を貸与した。しかし、鹿の乱獲と大雪による餓死、鉄道の敷設などによって鹿の数が激減したため、明治十二年には十勝一國および現安平町を含む胆振国勇払郡植苗村美々より四里四方の地域は鹿の保護繁殖のため、アイヌの人々以外の鹿猟は禁猟とされた。

フモンケ地区開拓の先駆者となった佐々木駒吉・ヤエ夫妻が父惣右衛門とともに植苗村美々に入植したのは、明治九年のことである。佐々木駒吉は、この地で安宿業兼馬宿をはじめ、休憩所を兼ねて酒や菓子・日用品などの販売や、ダンツケ運送をしていた。植苗村美々は、札幌本道の開通に加え、岩見沢・角田（現栗山町）・厚真・鷗川（現むかわ町鷗川地区）方面と、札幌本道を結ぶ交通の要衝でもあり、鹿肉缶詰製造所の設置により佐々木駒吉の家業もますます繁盛した。しかし、鹿の乱獲による個体数の減少に加え、明治十二年春の大雪は鹿を全滅に近い状態にまで餓死させ、缶詰工場も翌十三年に操業中止となり、明治十七年にはついに廃止された。それにもまして、北海道炭礦鉄道会社による室蘭線鉄道の建設が住民たちに大きな衝撃を与えた。

明治二十二年に創立した北海道炭礦鉄道会社は、明治十三年に開通した手宮―札幌間、明治十五年に開通した札幌―幌内間、および明治二十二年に開通した幌内―幾春別間の鉄道の払下げを受けるとともに、空知・夕張の炭田を大々的に開発するため、新たに室蘭を石炭移出港に選定し、室蘭―岩見沢―空知太（現砂川市）間の鉄道と、この路線から分岐して夕張・空知の両炭鉱に達する支線の敷設認可を得て、翌二十三年に着工することになった。これより先に道庁の役人からこのことを聞きつけた植苗村美々の井上利三郎から相談を受けた佐々木駒吉らは、道路交通が鉄道輸送に置き換わり、植苗村美々が交通の要衝ではなくなるため、鉄道沿線付近で農耕や馬の放牧に適したフモンケ地区に生活拠点を移すべきと考え、明治二十二年にフモンケ地区の土地貸付を出願し、許可を受けた。こうして、同年秋フモンケ地区に佐々木駒吉・ヤエ夫妻によって、旧早来町の開基となる開拓の最初の鉄が下ろされた。

鉄道建設工事が進むにつれ、工事関係者や一般移住者も住みつくようになり、その後、明治二十五年八月一日、室蘭線鉄道の開通とともに、追分停車場が開業（同年十一月一日に開通した夕張線と室蘭線の分岐点となったため追分停車場と名付けた）し、この日を旧追分町の開基とした。また、これら鉄道の開通に伴い、鉄道従業員や各地からの入植者が増え、しだいに活況を呈し、停車場周辺には鉄道会社の杜宅や商店等が立ち並び市街地が形成された。明治二十七年には苫小牧尋常小学校植苗分校も創立された（明治三十一年に植苗尋常小学校として独立、三十六年には追分尋常小学校に改称）。その当時、追分一帯の地はアピラと呼ばれていたが、翌二十八年には駅名にちなんで追分に改称された。その後、追分郵便局の開局（明治二十九年）、私設追分消防組の組織（明治三十年）、真宗大谷派説教場（現法養寺）の創立（明治三十二年）、追分八幡神社の創祀（明治三十二年）など、追分市街地は急速に発展した。

室蘭線鉄道が開通して二年後の明治二十七年八月一日に、早来駅が開業した。この駅は植苗村美々・千歳方面および厚真・鵠川・穂別（現むかわ町穂別地区）方面からの物資の集積地として奥地産業の発展に大きな役割を果たすものであった。明治二十九年には早来駅から厚真村振老に通ずる殖民道路が開削され、杣夫・木びき・馬追いなどが盛んに出入りするようになり、商店・料理店・宿屋などが軒を並べるようになった。また、明治二十八年には早来神社が創祀され、翌二十九年には私立早来小学校が開校（明治三十年に苫小牧尋常高等小学校早来分校、三十二年に独立して早来尋常小学校となる）、早来郵便局も開局したほか、檜山の江差から来た住職前谷慧光が曹洞宗早来布教所（現瑞雲寺）を創立した。

第二節 開拓の進展

室蘭線鉄道の建設工事が始まると、その沿線に農場を開拓しようと、石狩国札幌区在住の藪惣七が福井県人の吉村要三郎を農場管理人として、植苗村字アビラ（現東遠浅地区）で藪農場を開拓した。明治二十四（一八九一）年のことである。当時、この辺り一帯は勇払官林地区で、国有未開地貸下の対象になつていなかったが、貸付許可を待たずに開拓に着手した。しかし、安平川の氾濫が絶えないこの地区の開拓は容易なものではなく、安平川の切り替え・堤防構築・林木伐採などを行い、明治二十七年春には三十数戸の小作人を入地させた。その前年の明治二十六年には、勇払官林地区が貸付地区に編入されたため、藪農場は貸付許可となった。明治二十八年には、旧札幌神社社殿の払下げを受け、農場内に東

遠浅神社を創建し、明治三十二年には遠浅特別教授場（後の遠浅小学校）を創立した。

明治二十五年に室蘭線鉄道が開通されると、追分地域における農業の創始である福井県人の松浦幸寿がボンアビラ（現追分美園周辺）の地に土地貸付を受け開墾に従事した。この頃からボンアビラ方面への入植者も増え、農業も盛んになってきた。また、明治二十八年には夕張郡由仁村の吉崎良助がボンアビラで吉崎農場を開設している。

明治二十六年には、鳥取県人の布広奎太郎が岩見沢から単身シアビラ（現早来瑞穂）に入地し、水田の開墾を始めた。彼は室蘭線鉄道の測量技師としてこの地を訪れた際に、水田耕作の適地と判断し、現在の国道二三四号の支安平橋からやや東寄りのシアビラ川流域に茅屋を構えて、この地で最初の水田試作に着手し、翌二十七年には反収三俵を収穫した。この年の春、岩見沢に住んでいた森松太郎・森下辰三郎・武田弥一・田中鉄太郎の四人がシアビラに農耕適地を選定し、貸付許可を得た。また、明治二十八・二十九年三月までに岩見沢方面の鳥取県人を主とする同志二六戸がこの地に入地している。なお、農業に従事することを目的に、岩見沢方面から早来の地に集団で再移住した鳥取県人を「鳥取団体」と呼んでいる。明治三十一年には苫小牧尋常高等小学校鳥取分校が認可され、鳥取神社も創建された。

第三節 戸長役場の設置と安平村の成立

植苗村と勇払村の一部であったこの地方は、室蘭線鉄道の敷設を契機として急速に入植者が増加し